

北九州市域 北九州市域の東部、特に小倉南区で近年この時期の遺跡が幾つか発見されている。菊水町遺跡では、サヌカイト製の横長剥片を素材とした、いわゆる国府型ナイフ形石器が出土している。

また、長野A遺跡からは黒曜石製の台形様石器が出土している。更に、砥石山遺跡では黒曜石製の剥片尖頭器とスクレイパーが、長行遺跡では縄文時代の包含層から黒曜石製の細石刃核が出土している。平尾台遺跡からは水晶製の細石核一点、姫島産黒曜石製の細石刃二点、佐賀県腰岳産黒曜石製の細石刃五点、水晶製の細石刃一点と安山岩製の台形様石器一点が採集されている。なお、北九州市椎木山遺跡では二棟の住居跡が発見されており、平面形態が楕円形と変形五角形をなし、柱穴や炉を伴っている。しかし、住居の屋根などの上部構造については分かっていない。

第四節 北部九州の旧石器時代の遺跡

前期旧石器の遺跡

北部九州で前期旧石器に属するといわれる遺跡には、大分県日出町早水台遺跡・大分市丹生遺跡・福岡県瀬高町清水遺跡などがある。これらの遺跡からは礫核石器やチャップパーなどが出土しており、その形態的特徴から一〇万年前後までさかのぼると考えられている。しかし、石器のなかには、出土状況に疑問が残るものや、人工品ではなく自然作用のなかで偶然できた偽石器の可能性があるものもある。

また、北九州市辻田遺跡では、チョッパーや尖頭状石器など二三点の石器が出土しているが、これらは「中期旧石器」とも呼ばれる時期の遺物と考えられている。

長崎県吉井町福井岩陰第一五層（第7文化層）は、放射性炭素による年代測定で三万一九〇〇年前の層位とされ、出土した安山岩製の両面加工石器は約三万年前にさかのぼりうるとされている（第7図参照）。

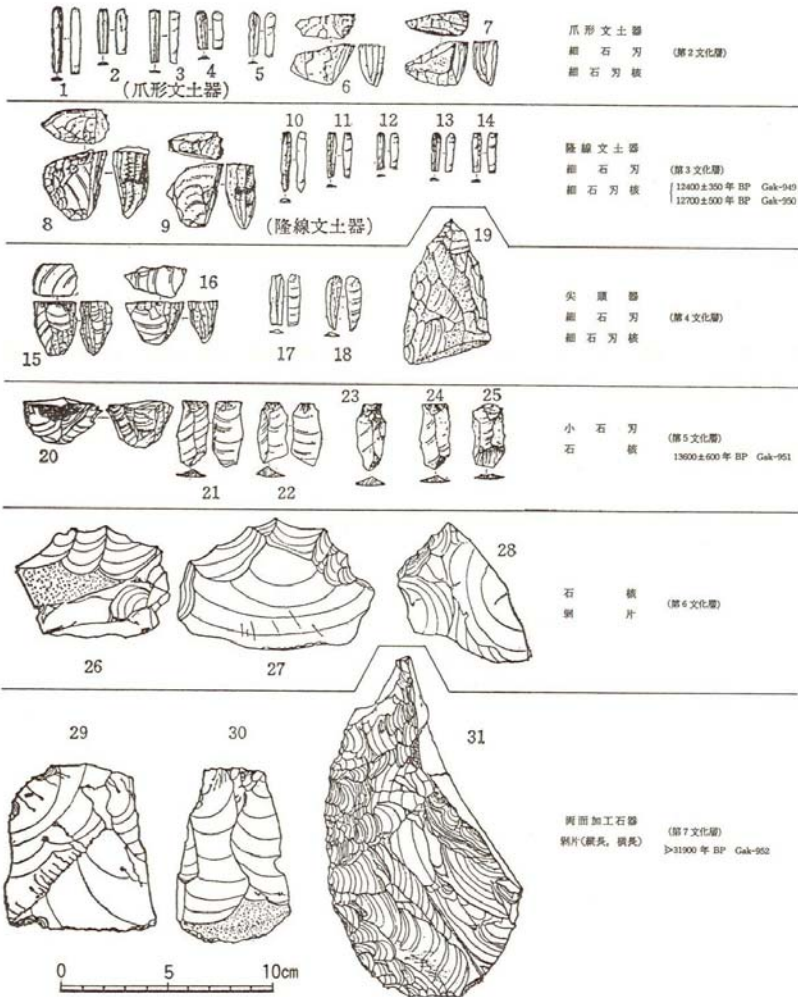
ナイフ形石

器の文化

ナイフ形石器文化は全国的にみて、約三万年から始まる。九州内で最も一般的に出土するこのナイフ形の刃を持つ石器で、ナイフとしての機能と刺突具としての機能を持つ。台形石器もナイフ形石器の一種であるが、鏃としての機能を持つ可能性がある。長崎県田平町の日ノ岳遺跡ではⅢ層から台形石器または台形様石器が一八点、ナイフ形石器全体では一二点が出土しているが、上層のⅡ層ではナイフ形石器一三点对し、台形様石器は一点しか出土していない。また、長崎県国見町百花台遺跡では比較的新しい時期のやや小形の台形石器が出土している。全体としては、台形石器はナイフ形石器文化の初期から盛んに製作され、中期に衰退したのち終末期にやや小形のもの再び製作されるようになる。西九州で出土する台形石器は終末期の小形のものが多い。一方、茂呂型ナイフ形石器は台形石器よりやや遅れて九州や関東・中部地方で広く製作される。この両者の石器が出土している北部九州の主な遺跡としては、福岡市諸岡遺跡・佐賀県肥前町磯道遺跡・長崎県平戸市中山遺跡などがある。また、近畿・瀬戸内地方でみられるサヌカイトの横長剥片を素材とする国府型ナイフ形石器は、北部九州の瀬戸内海周辺でも後半期に使用されている。

ナイフ形石器文化も後期になると、九州ではナイフ形石器とともに尖頭器が作られるようになる。尖頭器

第2編 先史・原史



第7図 長崎県福井洞穴出土遺物

(芹沢長介「日本旧石器の研究史」『新版考古学講座3』より)

は槍先に使用する狩猟具であるが、剥片尖頭器と三稜尖頭器の二つの形態がある。剥片尖頭器は縦長剥片の先端部をとがらせ、打面側の基部の両側縁を打ち欠いてやや細くしたものである。三稜尖頭器は断面三角形をなす棒状の尖頭器である。これらの尖頭器はナイフ形石器文化の衰退とともに、減少していく。

細石刃の文化

細石刃は長さ三〜四センチメートル、幅〇・五センチメートル前後の薄い板状の石器で、骨などで作った槍先の側縁に細い溝を彫り、そこに数本並べて埋め込んで使用する。細石刃文化は日本だけでなく、中国東北部からシベリアにかけてよく発達した。細石刃を作るには、まず母体となる細石核を製作するが、北部九州では野岳型・福井型などのタイプの細石核がある。福井型細石核は隆線文土器などの縄文時代草創期の土器とともに出土する場合がある。この細石刃文化をもって旧石器時代が終焉し、新しく縄文時代が始まるのである。